

『言っ**て**はいけない』 橘 玲

新潮新書

(サブタイトル) 残酷すぎる真実 (著者曰く「不愉快な本」)

レポーター: 白鳥 裕 (藤沢西高校教諭)

〈著書(著者)のコンセプト〉

社会的タブーとされていることを、遺伝学的切り口を論拠に、ズバリ活字本にして社会にアピールしたものと考えられる。

従来の世間的良識では、自分がどんなに現実や事実だと思っていることでも、相手を傷つける言葉を発したり行動することは、分別ある大人のやることではないとされてきた。特に社会的弱者や少数者に対して、彼らを傷つけることにつながる差別的表現や倫理観にもとるようなことについては、たとえ心の中で真実だと思っ**て**いても、ズバリ指摘することは自分自身が社会からバッシングされる覚悟が必要である。

著者はあえてそのタブーに、真実を直視することは必要だという認識から、「科学的根拠」を武器に挑戦したというのが、この本や著者のコンセプトであると思うが…。

(著書の前書き P6 の 7 行目…「言っ**て**はいけない」とされる残酷すぎる真実こそが、世の中をよくするために必要なのだ。…と語っている)

しかし…

◎著者は作家(小説家)であり、学者ではない

◎ネタ本からの引用や編集がほとんど

ex. エイドリアン=レイン 『暴力の解剖学』、
 チャールズ=マレー 『階級「断絶」社会アメリカ』
 鈴木大介 『最貧困女子』
 マリナ=アドシェイド 『セックスと恋愛の経済学』
 ジュディス=リッチ=ハリス 『子育ての大誤解』

etc.

ただし、膨大な読書量に基づいていることは間違いないので、単に都合のいい記事を寄せ集めただけの編集もの(いわゆるバツ本!)と言い切れない側面はある。

(前書き P6 の 9 行目…本書で述べたことは全てエビデンス(証拠)がある。…と著者は言っている。でも、論旨の核心をつく肝心なことに対しては、科学的証明が抜けている部分も多いので、基本的にこの本はバツ本だと白鳥は思いますがね…。)

〈著書概要〉

I 努力は遺伝に勝てないのか

① 遺伝にまつわる語られざるタブー

P17 ~ 馬鹿は遺伝する

その事実がタブー視された理由(→ P20 10 行目)

「…学校教育では、すべての子どもによい成績を獲得するようがんばることが強制されている。もしも知能が遺伝し「馬鹿な親から馬鹿な子どもが生まれる」のなら、努力は無駄になって「教育」が成立しなくなってしまう。だからこそ、自然科学の研究成果とは無関係に、「(負の)知能は遺伝しない」というイデオロギー(お話)が必要とされるのだ。」

P21 ~ 依存症・精神病は遺伝する

それを指摘した著者の真意(P26 2 行目~)

「…科学的知見を「不都合なイデオロギー」として拒絶するのではなく、それを精神病の予防や治療につなげ、社会の偏見をなくしていく様努力することが求められているのだ。」

P26 ~ 犯罪は遺伝する

P30 ~ (コラム 1) “遺伝率” (についての「専門的」説明)

P32 ~ (コラム 2) “遺伝と犯罪” (についての「専門的」説明)

② 「頭がよくなる」とはどういうことか — 知能のタブー

P35 ~ 親の収入と子どもの学歴は関連する

人種と知能は相関性がある

「リベラル」からの反論(P37の2行目~)

…子どもは皆平等に生まれてくるが、環境によって知能の差が生じる(環境決定論)(→現在は行動遺伝学双生児研究などによって、完膚なきまで否定されている)

P38 ~ 人種とIQには相関がある

P41 ~ 差別のない平等社会はつukれない

黒人は遺伝的に知能が低い(ジェンセン・スキヤンダル)

知能格差の真因とは(P45の15行目~)

「現在では、人種間で知能の差があることはさまざまな研究で疑いのない事実とされている。議論が分かれるのは、それが遺伝的なものかどうかということだ。」

(→ P47 の表)

知能の格差は差別に直結し、政治的な問題となっ**て**はげしい論争を生む。

(P48の7行目~)

「…なぜなら私たちが暮らす「知識社会」が、ヒトのさまざまな能力のなかで知的能力に特権的な価値にを与えているからだ。」

「潜在的な知能は人種にかかわらず均質でなければならない」といイデオロギー的要請、・・・「人種と知能は無関係」という前提で社会のしくみが成り立っているとすると、その前提が否定されれば大混乱に陥ってしまう。

P49～(コラム3) “ユダヤ人はなぜ知能が高いのか”

「世界人口の 600 分の 1 にも満たない彼らは、ノーベル賞の 4 分の 1 以上を獲得している (ただし、きわめて知能が高いのはアシュケナージ系ユダヤ人だけ)」

(→ドイツのライン川沿いのユダヤ人コミュニティーを発祥とするユダヤ人)

(P51 の 4 行目～)

「ヨーロッパにおける激しいユダヤ人差別によって、人口の増加が抑えられていたこと、キリスト教で禁忌とされていた金貸しで生計を立てざるを得なかったこと(このことに必要不可欠な数学的知能(計算能力)に秀でる)、他民族との婚姻の禁忌」
→ これらのことから、数十世代のうちに知能に関する遺伝的な変異が起きた

P53～(コラム4) “アジア系の知能と遺伝”

③ 知識社会で勝ち抜く人、最貧困層に墜ちる人

P58～ 経済格差の根源は何か

「白人と黒人のあいだにはおよそ 1 標準偏差 (白人を 100 とすると黒人は 85) の IQ の差がある」

P59～ アメリカの経済格差は知能の格差だ。

超高学歴でエリート主義のスノッブたち (「新上流階級」「スーパーZIP」)

P63～ 強欲な 1% と善良で貧しい 99%

「古きよきアメリカ」は失われた・・・1960年代くらいまで、アメリカ人の大富豪は庶民とたいして変わらなかった。・・・異なる文化的コンテンツをもっているわけではなかった。

P69～ 日本社会に潜む「最貧困層」

「最貧困女子」の広がり

(20代の女性、多くが地方出身、家族や友人と切り離され、都会で孤独に暮らす)

彼女たちがもつ「3つの障害」(精神障害、発達障害、知的障害)

「つきあうのが面倒くさいので、仲間から排除され、学校でいじめに遭って家出するが、行政の保護は期待できない(3つの障害を持つ相談者に親身につき合うことは面倒くさい)、家出少女を保護しても家庭に連絡するか地元の施設に引き渡すという画一的な対応をされるので、当の家出少女が公的サービスを忌避する」

そんな彼女たちのセーフティネットが路上のスカウト

若い女性を風俗店で働かせて上前をはねる

商売の元手を生かしておかなければならないから、最低限の“福祉”を提供する

(P71 の 9 行目～)

「ところが現在、日本社会の最貧困層の生態系に大きな変化が起きている。少子高齢化と価値観の変化(若い男性の草食化)によって、風俗の市場が大きく縮小してしまったのだ。同時に、女性の側に「身体を売る」ことへの抵抗がなくなって風俗嬢志望者が激増した。需要が減って供給が増えたのだから、当然、価格は下落する。」

“セックスのデフレ化”

「かつては月 100 万円稼ぐ風俗嬢は珍しくなかったが、今や地方の風俗店では週 4 日出勤しても月 25 万円程度、コンビニや居酒屋の店員と変わらない。」

さらに、景気の悪化によって風俗業界が新規採用を抑制

「日本社会は(おそらく)人類史上はじめて、若い女性が身体を売りたいくても売れない時代を迎えた。」

「彼女たちは最底辺の風俗業者にすら相手にされないの、自力で相手を探すか、路上に立つしかない。それでもじゅうぶんな稼ぎにはほど遠く、家賃滞納でアパートを追い出され、ネットカフェで寝泊まりするようになる——すなわち「最貧困女子」の誕生だ。」

(でも白鳥思うに、「3つの障害」を抱えているような子が、自力で都会に出て来てアパートを探したり、営業活動したり、ネットカフェで生活したりなどできるわけがないと思いますがね・・・)

「最貧困女子は「3つの障害」によって、社会資本(家族や友人)も金融資本(貯金)もほとんどもっていないため、人的資本(仕事)を失うとあつというまに社会の最底辺に墜ちてしまう。・・・知能の格差が経済格差として現れている。・・・」

「私たちはこの「残酷すぎる真実」を直視するのを恐れ、知能と貧困の明白な関係にずっと気づかないふりをしてきた。税金を投入して高等教育を無償化したところで、教育に適性のない最貧困層の困窮はなにひとつ改善しないだろう。その代わりに、知識社会に適応した高学歴層(教育関係者)の既得権がまたひとつ増えるだけだ。」

・・・教育関係者は「知能の遺伝率は極めて高い」という行動遺伝学の知見を無視し、説明責任を放棄したまま「教育にもっと税を投入すればみんなが幸福になれる」と主張して巨額の公費を手に入れている。」

「知識社会」とは、知能の高い人間が知能の低い人間を搾取する社会のことなのだ。

④ 進化がもたらす、残酷なレイプは防げるか

P73 ①～⑥の陰惨な数字 継親による継子殺人、虐待の極端な多さ

P74～ 犯罪は「凶暴な男」の問題

女性(卵子)と男性(精子)についての進化生物学的説明

(権力を握った男がハーレムをつくらうとする理由)

P75～ 進化のために赤ん坊が殺される

「女性は自分の子どもを確実に知っているが、男性には知る術がない。・・・男性にとっての最大の「進化的損失」は、血のつながらない子どもに貴重な資源を投じることだ。」

「母親にとって、出産と子育てに大きなコストがかかる・・・若い未婚の女性は、望まない妊娠をしたときにきわめて困難な選択を迫られる。・・・生き延びる可能性の低い子どもを養育することは「進化的損失」なのだ。・・・生まれてすぐに(養育コストがゼロのうちに)子どもを殺すことがもっとも「経済合理的」な行動になる。」

P78～ 妻殺しやレイプを誘発する残酷な真実

「子どもと血縁を確認する方法をもたない男性にとって、もっとも大きな進化的損失は、他人の子どもをそうとは知らずに育てさせられることだ。」

…夫婦間での殺しの大半は夫の嫉妬が原因である。…

「殺されるのは高齢の妻でなく若い妻で、とりわけ夫が20歳未満の妻を殺す事件が顕著に多い。…このことは進化論的には奇妙だが（女性の繁殖力は若いほど高いので、若い妻の方が価値が高いはずなのに）、しかし若い妻をもつのは若い夫であることが多く、若い夫がもっとも暴力的であることと、女性の繁殖力が高いほど嫉妬も激しくなるからと考える。」

…一家皆殺しは男しか起こさない

P82～ オランウータンもレイプする

レイプは生物界ではよく見られる性戦略

P85～ 夫婦間のレイプはなぜ起こるのか

「自然は道徳的なものではなく、さまざまな戦略をとる個体のうち、後世により多くの子孫を残した遺伝子が生き残っていくだけ…女性獲得競争で…すぐにあきらめてしまうような遺伝的プログラムは、性淘汰の中でとっくの昔に消えてしまったはず…」

「女の側でも対抗策を進化させてきた…レイプされた女性がオルガスムを感じないこと…女性がオルガスムを感じるとオキシトシンという性ホルモンが分泌され、これによって子宮が収縮し、スポットのようにより多くの精子を吸い上げる。レイプではこの効果がないため、妊娠しにくいのではないか。」

「レイプされた女性は、当然のことながら大きな精神的ショックを受けるが、これも進化論的な適応の可能性がある。…利害関係を持つ男性（とりわけ夫）の怒りは…被害者である女性にも向けられる…合意の上でのセックスではないかと疑うのだ。その結果、夫からの資源の提供を打ち切られると、レイプ被害者は生きていけなくなってしまう…レイプによって激しく傷ついた姿を見せることで夫の嫉妬や疑いをかわすように進化したとしても不思議はない。…暴力的に関係を迫られた証拠が身体に残っていたほうが、レイプされた女性の精神的苦痛が少ないことがわかっているが、これは一方的なレイプだった（合意のうえでのセックスではない）ことを夫に信じてもらいやすくなるからだろう。」

「…レイプ犯の子どもを産むことが女性にとって進化の適応である可能性すら指摘する。性淘汰の目的が後世により多くの遺伝子を残すことであれば、フェアプレイで競争する個体よりも巧みにレイプする個体のほうが有利かもしれないのだ。」

…これが進化心理学の典型的な考え方だ。」

「近年は夫婦間や長くつき合っているカップルのあいだでもレイプが起こることがわかってきた。…こうしたレイプのほとんどが、男性が妻や恋人の不倫を疑ったときに起こっている。」

なぜ嫉妬に駆られた男は妻や恋人を犯すのか？

「“進化論的に合理的”であるとすれば、その目的は自分の精子を子宮に注入することだ。そうすれば、ライバルの精子に打ち勝つ可能性が多少はあるのだから。」

P87～（コラム5）“実の親と義理の親の子殺し”

血のつながりと養育コストが関係する子殺し（P88～P89のグラフ参照）

P91～（コラム6）“家庭内殺人と血縁”

もっとも危険な場所は家庭（…殺人の多くが家庭内で起きている）

「午前3時のセントラルパークよりも家族といるほうが危ない」

（→ただし、これは統計の誤用である）

5 反社会的人間はどのように生まれるか

P93～ ところを支配するもの

マイケル=オフトのケース 小児性愛と脳腫瘍との関係

P95～ 心拍数と反社会的行動の因果関係

心拍数の低さと反社会的、攻撃的な行動は相関する

→ 恐れ、欠如、共感力の欠如、刺激の追求が原因とされる

「心拍数で将来の犯罪を予測できる」という仮説が、大規模な実証実験によって証明されている

P99～ 犯罪者になる子ども、実業家になる子ども

3歳児段階で、子どもたちを刺激を避けるタイプと冒険タイプに分け、その後の人生を検証

11歳児段階で、後者は前者の3倍も攻撃性が高かった

しかし、ヴァージングループ創設者リチャード=ブランソンの成功例もある

P101の9行目～

「心拍数の低い子どもは刺激を求めて反社会的な行動に走ることが多い。覚醒度の低さが生理的に不快で…だがもし知能や才能に恵まれていれば、社会的・経済的にとてつもない成功を手にするかもしれない。」

P101～ 「発汗しない子ども」は良心を学習できない

「…3歳時点の恐怖条件付け実験で、一般の子どもは、不愉快な音を予告する低音を聞くと、発汗量が増加する。ところが将来犯罪者になる被験者には、この反応が全く見られなかった。」

刺激を求める「彼ら」→ 犯罪者であることを知られずに社会に紛れ込んでいる「賢いサイコパス」は、自分の「犯罪体験」を嬉々として話す

P104～ 「賢いサイコパス」と「愚かなサイコパス」

「一般集団における男性の反社会的パーソナリティ障害の基準率は3%だが、職業紹介所で募集した被験者では基準率24.1%という驚異的な値が得られた。彼らのうち、43%にはレイプの、53%に障害の経験があり、29%は武装強盗、38%は他人への発砲、そして29%は殺人未遂もしくは殺人をおかしていた。…それなのに彼らの多くは、これまでい子ども警察の捜査対象になったことがないのだ。」

刑務所に収監されている「愚かなサイコパス」や一般人との比較

（皮膚コンダクタンス反応実験）

「愚かなサイコパス」→ 発汗のない低い値（恐怖条件付け機能の障害か）

（→ それにより良心を学習する能力が育たない）

「賢いサイコパス」と一般人 → ストレスによって発汗率が上昇

さらに計画・注意・認知の柔軟性などの実行機能 → 「賢いサイコパス」は高い

（仮説）では、なぜ彼らは犯罪の道を選んだか

「賢いサイコパス」は親密な社会関係形成機会の喪失（養子、孤児院での生活などで実の両親との結びつきが弱かった）で良心を学ぶ機会が薄かったこと。

+ 心拍数の低さ（P107の図）

一気に心拍数が上がる刺激が快感に変わるので、刺激を求めるようになったのではないかという仮説（刺激が快感になるなら、心拍数を急上昇させるような体験を何度も求めるようになる）

P106～ 少年犯罪者や異常性欲者への驚愕の治療法
少年犯罪者ダニーの例 「バックマン」のゲームで劇的に改善
異常性欲者ビル・モリスの例 SRI（セロトニン再取り込み阻害剤）
（ありふれた抗うつ剤）投与で性衝動ほとんどなくなる

P109～ 脳科学による犯罪者早期発見システム
神経犯罪学者 エイドリアン・レイン
「ロンブローゾ・プログラム」（犯罪者早期発見システム）が運用される近未来社会を描く → 陽性と判断されれば、特別施設へ無期限収容

P112～ 子どもの選別と親の免許制
「全国子ども選別プログラム」「子どもを産むにはまず免許を取得しなければならない」「親のよき行動は子どものよき行動を導く」
「…「安全な社会」を求める人々の要求のほうが強ければ、将来、このような制度が導入されたとしても不思議はない。」

P114～ 非科学的な人権侵害よりも脳科学による監視社会を
「脳科学による監視社会」
「…より科学的に正しい方法で犯罪を管理したほうが、社会にとっても、当の犯罪者にとっても、状況はいまよりずっと改善する…」

P116～（コラム7）“犯罪と妊婦の喫煙・飲酒”
「血中の鉛レベルが高い少年は、教師の評価でも自己評価でも非行スコアが高い…鉛で汚染された母乳で育てられた乳児は成人して犯罪者になる可能性が高い…だが、それよりも問題が大きいのは妊婦の喫煙と飲酒だ」

タバコには一酸化炭素とニコチンの2種類の神経毒性があり、母親の喫煙により胎児の交感神経系の活動を損ない、自律神経の機能低下、安静時心拍数の低下による覚醒度の低い、常に刺激を求める子どもが生まれるとのこと。

また、アルコールは胎児の脳組織の萎縮、脳梁の機能喪失、ニューロンの損失をもたらすとのこと。

II あまりに残酷な「美貌格差」

⑥ 「見た目」で人生は決まる——容貌のタブー

P122～ 写真から性格や未来がわかる
マシュー・ハーテンステインの研究
「…卒業アルバム写真を何百枚も集めて笑顔の度合いを点数化し、後年の結婚生活を予測…あまり笑っていなかったひとの離婚率は、満面の笑みの卒業生の5倍にのぼる」

写真による推測と実際の性格との比較
無表情の写真からも内面をある程度知ることができた（「外交性」とか）
自然体の写真では推測の精度が上がった（手がかりは「笑顔」など）
判別できなかったのは「誠実さ」「穏やかさ」「政治的見解」

P124～ 外見から知性は推測できる
①音声のある1分間の映像 → 学生の知能を正確に推測
②音声のない1分間の映像 → 学生の知能を正確に推測
③1分間の会話を書き起こした文章 → 全く推測できず
「…平均的な容貌で、全体のバランスがよく好感が持てると、ひとはそれを知性に結びつける」

P126～ 「最初の直感」の的中率
「ひとは外見だけで、見ず知らずの人間の性格や知性を判断できる。」
学生による教師評価 授業初日の評価と学期末の評価はほぼ一致した
映像だけで有能な教授と無能な教授を見分けた
映像は長くても短くても評価は変わらなかった
さらに秋学期と春学期で、プレゼンテーション・スキルを違えて実験したら、授業内容は同じなのにプレゼンの違いだけで評価が違った（もちろんプレゼンテーション・スキルの高いほうが評価が高かった）しかし、どちらのグループもテストの成績は変わらなかった（学生は「多くのことを学んだ」と感じただけ）

P130～ 「面長の顔」は「幅の広い顔」に殺されている
外形から攻撃性を推測できる
平均的に、テストステロン（代表的な男性ホルモン）濃度が高い男性ほど顔の幅が広くなり、攻撃的な性格が高まる
ハーテンステインの研究
①幅の広い顔の男性は、ほっそりした顔の男性に比べて、ライバルを蹴落とすために3倍嘘をつく。
②サイコロの目の数でくじに参加できる実験では…実際に出た目よりも多い数を申告する比率が9倍になった。
③賞金を山分けするか、自分が多く取るかでは…公平に分配することを嫌った。
④…絞殺、刺殺、撲殺などの接触的な暴力で殺された人の頭蓋骨は、ほっそりした顔の男性が圧倒的に多かった。

P132～ 顔立ちによる残酷すぎる損得
童顔の顔（純真・素直・か弱い・暖かい・正直というイメージ、しかし非情さに欠けるといイメージもある）の男性と、大人びた顔（決断力があり、時に非情な態度もとれるというイメージ）の男性の損得（銀行の窓口係と給料の高い融資査定係のどちらになるかは顔立ちで決まる）
逆に、童顔の顔の男性にカネを騙し取られたと訴えても、多くの場合敗訴。大人びた顔の男性は92%が有罪になったが、童顔は45%だった。
人種と容貌の不穏な研究
「アフロセントリック」な顔の被告は、裁判でより重い罰を下されていた

7 あまりに残酷な美貌格差

P136～ ダニエル=ハマーメッシュ

…あらゆる社会に共通する普遍的な美の基準は、「顔の対称性と肌のなめらかさ」「ウエストのくびれ」である。…それにより、感染症の兆候や妊娠の可能性有無を判断している。

(これは健康で妊娠していない女性を選好する進化のプログラムであるとのこと。)

→ 現在では進化生物学や進化心理学の標準的な理論らしい)

しかし、現代人の美の選好が、すべて進化で説明できるわけではない。

「ヒトと大半の遺伝子を共有するチンパンジーやボノボのオスは、若い“処女”よりも出産経験のある年長のメスに魅力を感じる。貴重な食料とセックスを交換するのなら、健康な子どもを産む能力を証明している相手のほうが“投資効率”が高いわけで、確かにこのほうが進化論的に合理的だ。」

P137～ 美人とブスでは経済格差は3600万円

美貌の経済効果を計測

「平均より上と評価された女性は、平凡な容姿の女性より8%収入が多かった。平均より下と評価された女性は4%収入が少なかった。…このプレミアムとペナルティの金額差は、…美人は生涯に2400万円得し、不美人は1200万円損をするから、その美貌格差の総額は3600万円にもなる。」

「美貌と幸福の関係も相関があるが、思ったほど大きくない。しかし、このことは男性よりも女性にとって大きな心理的圧迫になっている。これは男性が女性の若さや外見、すなわち生殖能力に魅力を感じるからで、これによって女性は熾烈な「美」の競争へと駆り立てられる。それに対し女性は、男性の外見以外にも、社会的な地位や権力、資産に魅力を感じる。…その結果、女性だけが美しさの呪縛に苦しむことになる。過度なダイエットや拒食症、整形手術による身体への暴力は、「美の陰謀」なのだ…。」

P140～ 「美貌格差」最大の被害者とは

「…容姿の劣る男性は、平均的な男性に比べて13%も収入が少ない。女性に比べ、醜さのペナルティは3倍以上になる…。」

「ただし、(不美人のため収入の高い仕事に就けないという不満から)働かないで家庭にはいる女性もいるので、働いている女性は美人度が高い、即ち収入の多い女性が多いとすると、単純に容姿だけで男女の差を比較することはできない。」

「…雇用主は履歴書だけでは誰が危険なのか判断できないので、若い男性の暴力犯罪率が高く、男性ホルモンであるテストステロンが暴力性と強く相関し、その影響が外見にも現れるというデータから、美醜よりも暴力性、暴力的な外見の若者が真っ先に排除されるからではないか…。」

P142～ 会社の業績を上げる経営者の顔とは

力(CEOの能力、統率力、顔の成熟度から判定)

温かみ(CEOの好感度、信頼度から判定)

リーダーシップ(この人物は巧みに会社を運営できるか?)

「CEOの顔から受ける「力」と「リーダーシップ」の印象だけで会社の業績を性格に予測できた(「温かみ」は関係なかった。)

「テストステロン値が高い(顔の幅が広い)男性は、攻撃的・暴力的な傾向が強く、冒険心に富み、競争に勝つことに執着するリーダータイプとみなされ、業績向上。」

「テストステロン値が低い(顔の細長い)男性は、「勝つ」ことへの執念が欠けていて、そのため出世競争で脱落してしまうし、仮にCEOになったとしても業績を上げることはできない。」

「精力的な男性は高齢になってもテストステロン値が下がらず、ビジネスでも性生活でも現役のことが多い。」

P146～ 容姿による差別を生む市場原理

元バニーガールの訴訟

「容姿の平等」という非現実的な理想を追い求めるよりも、美貌格差に対してアフーマティブ・アクション(積極的差別是正措置)の適用を検討するよう提言企業が差別する市場原理による理由(美形の従業員のほうが収益性が高い)

8 男女平等が妨げる「女性の幸福」について

P149～ 「男と女は生まれながらにしてちがっている」

ディー・エヌ・エー創業社長南場智子氏の例「…何のためらいもなく、私のとっての優先順位が、仕事から家庭へと変わってしまった…」

オプトアウト(自らの意思で仕事から身を引く)した女性たちのことば

P151～ 男と女は別々のものを見ている

「女の子は生まれつき人間の顔に興味を持ち、男の子は生得的に動くものに興味を持つ」

男性 桿状体M細胞(動きの探知装置)黒・灰(冷色)車等の動くものに反応

女性 錐状体P細胞(質感や色に反応)赤・オレンジ(暖色)人物や花を描く

「…幼稚園の先生の大半は女性で、男の子の特徴わからず、いくら指導しても暖かい色を使った人物を書くことのできない男の子は、「どこかおかしい」と判断されて「治療」の対象となってしまう。」(「ADHDの疑いがある」と診断されれば、リタリン(組成が覚醒剤のアムフェタミンとほとんど同じ)が大量に処方される)

P154～ 「男らしさ」「女らしさ」の正体とは

「男性と女性の脳組織に顕著な性差があることは、脳卒中と言語機能の関係から明らかになった。」

「男性の脳は機能が細分化されていて、言語を使う際に右脳をほとんど利用しないが、女性の脳では機能が広範囲に分布しており、言語のために脳の両方の半球を使っている」

「胎児の段階から男性ではテストステロン、女性ではエストロゲンなどの性ホルモンが脳の形成に影響を及ぼし、その結果、男性は空間把握や数学的推論の能力が発達し、女性は言語の流暢性を高めた。」

「男性の脳の特徴は「システム化」で、女性の脳は「共感」に秀でている」

性差別的な教育が「女らしさ」を植えつけるというボーヴォワール説は実験によって否定されている

キブツの実験「男はモノを相手にした仕事を、女はひととかかわる仕事を好む」

P157～ 「母性愛」のもと、オキシトシン

「女性が乳幼児に授乳や養育、保護などを行うとオキシトシンというホルモンが分泌される。オキシトシンとはモルヒネ様ホルモンで、その効果によって女性は「満ち足りた幸福感」を味わう。」「授乳中は鎮痛作用と快感誘発作用があるオキシトシンが数時間おきに母親の脳を満たす」

(→授乳中の母親は仕事に行くと供給が途切れるので、早く家に帰りたくなる。コカインよりも強力な体内ドラッグ。分娩やセックスのオルガスムでも分泌、セックス依存症は体内ドラッグの禁断症状?)→遺伝子を効率的に複製するための報酬である(by進化生物学者リチャード・ドーキンス)

P159～ 男女でちがう「幸福の優先順位」

女性の収入はどこの国でも男性より低い、いつの時代でも満足度は女性のほうが高かった。しかし、最近では女性が男性と変わらない職業選択をしつつあるためか、満足度が下がっている。

「自信のなさ」よりも「遺伝子の影響」？セロトニン不足は不安感を高め、鬱病のリスクを増す。セロトニン輸送効率の低いSS型のトランスポーター遺伝子をもつ女性は、同じタイプの遺伝子をもつ男性と比較して52%も脳内セロトニン濃度が少ない。→出世競争が苦痛

「男と女は生まれつき「幸福の優先順位」が異なる。女性は家庭と切り離されると人生の満足度が下がる。…しかし進化心理学は、女性は家事・育児をするよう進化したとは主張しない…高い知能と共感能力を持つ女性が、有能な医師や弁護士、教師や看護師・介護士として活躍できる自由な社会のほうがずっといいはずなので…両性の違いを認めようとして、男も女も幸福な人生を送れるような制度を目指すべき」

P162～ (コラム8) “女子校ではなぜ望まない妊娠が少ないのか”

男女の脳には生得的違いがある(見え方、聞こえ方、遊び方、学び方、けんかの仕方、世界の見え方など)

共学と女子校では生徒同士の関係のありかたがちがう

共学(なぜかグループ交際が当然の前提となっている)では、女の子は属するグループの地位によって、男の子グループの同じような地位のつき合う相手を選ぶ。そのことはつき合う相手のいる男の子グループ全員に紹介される→もし、ふられたら、その女の子が属しているグループ全員がそのことを知り、女の子のグループ内での人間関係、すなわち学校での社会的アイデンティティが危うくなる→男の子も、他の男子がセックスをしていると知ると、自分もできないとグループ内での地位が低下すると考える→そのため、自分がつき合っている女の子にも執拗にセックスを要求する→女の子も友達グループ同士の関係を壊さないため受け入れるしかないという「社会的圧力」を受け、それが望まない妊娠へとつながる

男女平等の社会をつくるためにこそ、男の子と女の子を別々に扱う必要がある

9 結婚相手選びとセックスにおける残酷な現実

P166～ フロイト理論の否定

イスラエルのキブツでの実験「幼年時代を共有した異性には性的関心を抱かない」

P167～ 一夫多妻と一夫一妻はどちらが得か

圧倒的多数の哺乳類はメスの排卵期にのみ発情

「ヒトのメスは、排卵を隠蔽して生殖可能な時期をわからなくし、受精できるかどうかにかかわらずセックスできるよう進化した。メスの排卵期を知ることができなくなったオスは、いつでもどこでも発情してセックスを求めようになった。この性への妄執が、知能の進化や文化の成立をもたらした。」

「ヒトを含むすべての生き物は、「構成により多くの遺伝情報を引き継ぐように進化の過程で最適化された“遺伝子の乗り物(ヴィークル)”」(リチャード・ドーキンス)「…遺伝子を「貨幣」、環境を「市場」とするならば、それは、市場で遺伝子という貨幣を最大化しようとする「経済学」として扱うことができる(ロバート・トリヴァース)」

生殖におけるオスとメスの投資額に大きな差あり(オスは精子の放出にほとんどコストがかからないが、メスは妊娠後も出産・授乳などの投資コストが高い)

→このため、オスはできるだけたくさんのメスと交尾しようとするが、メスは貴重な卵を最大限有効に使うために生殖相手をえり好みするようになる

→動物界では群れの中で最も強いオスがメスを独占するようになる(一夫多妻)

「しかし、ヒトは乳幼児が独立するまできわめて長期の養育が必要なので、一夫多妻ではオスから10分な支援を受けられない恐れあり、10の資源のオスを3人のメスで分け合うより、4の資源のオスを独占したほうが得と考える」(一夫一妻)

P169～ メスの狡猾な性戦略

「オスのラットは交尾を重ねるうちに飽きて、メスが交尾を求めても反応しなくなる。しかし、新しいメスを入れるとたちまち新しいメスと交尾を始める。」(クーリッジ効果)

「同じメスと複数回交尾したオスにとっては、自分の精子はじゅうぶんに注入したのだから、それ以上の努力は資源の無駄づかいだ…「利己的な遺伝子」は、精子を有効活用して子孫の数を最大にするよう、同じメスとのセックスに飽きたり、新しいメスに興奮したりするプログラムを本能に組み込んだ。」(オスが浮気する進化論的な理由)

「これに対抗し、メスも狡猾な性戦略を使っている。…優秀な遺伝子をもつオスにはライバルが多く、独占可能なオスはさほど優秀な遺伝子をもっていない…この問題にはきわめて簡単な解決方法がある。優秀な遺伝子を持つオスの子どもを、献身的に子育てするオスに育てさせればいい。…嫉妬の報復を避けながら、他人の子どもを自分たちの子どもだと巧みに偽って育てさせることだ。」

「平均すれば、男性の10%は他人の子どもを自分の子どもと誤解して育てている。…低所得者層にかぎれば30%に跳ね上がり、最高所得層の男性は2%に激減する…高所得層の男性と結婚した妻は欺瞞が発覚したときに失うリスクがあまりに大きい、逆に最低所得層の妻は稼ぎが少ない夫を失ったときのコストも小さいので、「ギャンブル」するハードルが低くなるから…」(ロビン・ベイカー)

P172～ 避妊法の普及が望まない妊娠を激増させる

① 1900年、19歳の未婚女性のうち性体験のある女性はわずか6%だったが、1世紀後には75%になっていた。

② 避妊技術は過去半世紀に向上の一途をたどったが、それにもかかわらず、未婚女性による出産数は同期間に5%から41%へと増えている。

「若い未婚女性の性体験が増えたのは、コンドームやピルのような避妊法が普及したからだ。セックスのコストをゼロにして快楽というベネフィットだけを享受できるのだから、カジュアルセックスが一般化するのには当然に思える。…しかし、未婚女性による出産も大幅に増えているという矛盾がある。」

「…これは、性市場ではさまざまなタイプの女性集団が男性をめぐる獲得競争をしているからである。」(マリナ・アドシエイド)

望まない妊娠を恐れて婚前交渉を避けている「妊娠のコストを重視する女性」

道徳的な罪悪感から婚前交渉を拒否する「道徳的な女性」

「前者は避妊技術が普及すれば積極的に性の快楽を楽しむ。こうした女性の行動が、道徳的な理由から婚前交渉を拒否してきた女性にも影響する。」

「性市場においては、多数の若い男性と若い女性が互いに性的なパートナーを獲得しようとする複雑なゲームを行っている。…保守的な社会では、売春以外でセックスを手に入れるためには、結婚によって生涯にわたる経済的援助を約束しなければならない…ハイコストな取引…このとき、あるタイプの女性が避妊を条件にカジュアルセックスを受け入れるようになったとすると、同じ商品を格安で販売するのと同じだから、「消費者」はこの女性に殺到する…やらせてくれる女の子はモテるのだ…そうすると道徳的な女の子はカレン獲得競争できわめて不利な立場に置

かれる・・・好きな男の子がいたとしても、セックスを拒んでいると、カレは「やらせてくれる」女の子のところに行ってしまうのだ。・・・性市場における女の子のセックスの価格も下落してしまう・・・多くの女の子が婚前交渉に応じざるを得なくなる。・・・「ピルで避妊できる」との理由でセックスをした割合は1%に満たない。だがこのわずかな女性の存在が、・・・コンドームなしのセックスを拒否できない女の子を激増させる。」

P175～ 低学歴の独身女性があぶれる理由

男女の性別役割分担の変化→女性の高学歴化、労働市場に女性が大量進出
女子学生をバーに連れて行って酔いつぶす→大酒している男子学生は半数いるが、彼らは残り半数に比べ、コンドーム使わずにセックスする率が20%高く、94%が複数の相手とセックスしていた→女子学生が断れない理由は需要と供給の関係（女子学生の数が増え、バーの誘いにつき合ってもくれないカタブツでは、魅力的な男子から声をかけてもらえないから）

高学歴で高所得の女性は、自分に釣り合った高学歴・高所得の男性とカップルになろうとする。男性も同様で、若さと美貌で選ぶのは一時的なロマンスに過ぎず、長期の関係を考えるなら、趣味嗜好や環境が全くちがう相手は億劫。また、今日の受験競争で男性のかなりが学歴社会から脱落し、高学歴の男性は多くないので高学歴の女性の恋愛市場が過当競争になり、あぶれるか低学歴の男性から好みに合う相手を選ぶしかない。・・・その結果、低学歴の女性は低学歴の男性の獲得市場でも不利になる（アメリカの黒人女性の半分が独身かシングルマザーになる理由、さらに黒人男性はパートナーの人種にこだわらず、また結婚しても刑務所への収容率が高いという理由）。

「解決策は「一夫多妻制」の導入だ。・・・「勝ち組」の男性が多く多くの女性を獲得することで、損をするのは「負け組」の男性で、女性の厚生は全体として向上する」（マリナ・アドシエイド）

10 女性はなぜエクスタシーで叫ぶのか？

P170～ 生き物のあらゆる行動は進化の淘汰圧から生じた適応

→「暴力的に女性を犯すのはモテない男の性戦略」「レイプされた女性が精神的に深く傷つくのは、そのほうが夫を説得しやすいから」「レイプに激しく抵抗するのは、それでもレイプする男の遺伝子が繁殖に有利だから」という「暴論」も切っ捨てて捨てることはできない

P180～ ヒトの本姓は一夫一妻？

ヒトは「一夫多妻に近い一夫一妻制」（デズモンド・モリス）の根拠は・・・

「・・・男は妻が他の男とセックスしないよう拘束する一方で、機会があれば妻以外の女性と性的関係を結ぼうとする。それに対して女は、夫が自分と子どもを裏切って他の女に資源を投じることを警戒する。この相互監視によって一夫一妻が人類に普遍的な婚姻関係になるが、男の欲望は可能な限り多くの女とセックスすることなのだから、権力をも鳥羽真っ先にハーレムをつくらうとする」

P181～ 睾丸とペニスの秘密

セックスにコストをかける必要がなくなるとペニスや睾丸は発達させる必要がなくなる

P183～ 女性の性衝動は弱いのか

ヒトのメスは排卵補隠蔽して生殖可能な時期をわからなくし、受胎できるかどうかにかかわらず、月経の全周期を通じてセックスできるように進化した。メスの排卵期を知ることができなくなったオスは、いつでもどこでも発情してセックスを求めようになった

女性に男性ほど性衝動は強くないとされてきたが、これは西欧的イデオロギーの反映・・・マッテオ・レアルド・コロombo 足の間にある小さな突起物（ボタン）の「発見」により、数日のうちに異端・瀆神・魔術・悪魔崇拝の嫌疑で逮捕、投獄される

「悪魔の乳首」クリトリスの異常に大きな女性はそれだけで火あぶりにされた女性マスターベーションはヒステリーや脊髄の炎症を引き起こし、てんかんや痙攣につながる→最も効果的な防ぐ手立てはクリトリスの外科的切除とす

P186～ チンパンジーとボノボ

「乱交指向」「ロマンチック指向」の衝突で「一夫一妻」と「一夫多妻」の混合形態となる

チンパンジーの生殖行動 ヒトの生態をよく説明

しかしチンパンジーのメスは妊娠可能期になると生殖器の周りが赤く膨らむが、ヒトのメスはわからない。むしろボノボと似ている（ペニスフェンシングはしないとす（ライアンとジェタ）

P190～ 農耕社会が全てを変えた？

ヒトの本姓は人類の歴史で最も長い200万年以上続いた旧石器時代（死亡率が高く、夫を失った母子は保護を失うので、誰が夫かわからなくなる乱婚が発達）につくられた。当時は乱婚であった。たかが農耕が始まった1万年や歴史が始まった2000年程度のヒトの生態を取り上げて本性ということとはできない。

男たちはどこで競争するのか、それは女性器（ヴァギナ）の中だ
人のペニスは長く、太く、先端にエラがついている。その特徴的なかたちとピストン運動によって、膈内に溜まっていた他の男の精液を除去し、その空隙に自分の精子を放出して真っ先に子宮に届くように最適化されている。

P193～ 女性がエクスタシーで叫ぶ理由

乱婚社会においては、オスは膈内で精子競争している
一方女性の性戦略は、多くの男と性交渉して、もっとも優秀な男の精子が競争に勝って受胎するのを期待する
ウェスターマーク効果（幼馴染みに性的魅力を感じない→遺伝的に不利な近親交配を避ける進化のしくみ）

男と女のオルガスムの違い

男は挿入後の数回のピストン運動でたちまち射精し、いったん射精すると性的欲望は消失する。

→どう猛な肉食獣が周りにいるので、声によって自分の居場所を知らせるのは危険なため、女性が大きな声を上げる性交で旧石器時代の男は素早く射精するようになった。

女は性的快感が時間とともに高まり、繰り返しオルガスムに達する。

→女性は、大きな声を上げることによって、他の男たちを興奮させて呼び寄せ、一度に複数の男と効率的に性交し、多数の精子を膈内で競争させるため、よがり声だけでなく、連続的なオルガスムを感じるようになったことが進化の適応

P196～ フリーセックスのユートピアは遠い

日本の「若衆宿」夜這いによる性の手ほどきや祭りの乱交が広く認められていた男の本性が乱婚なら女の本性も乱婚だった
農耕が「幸福な旧石器時代人」をエデンの園から追い払った
モン族の村

Ⅲ 子育てや教育は子どもの成長に関係ない

11 わたしはどのように「わたし」になるのか

P200～ 双生児の奇妙な類似

P202～ 「高貴な血」と「穢れた血」

わたしは、遺伝と環境によって「わたし」になった
「血の神話」高貴な血は子どもに引き継がれる？
→世代が替わるごとに遺伝子の共有比率は低くなり、数十世代もすれば「高貴な血」も「穢れた血」もヒトの遺伝子プールの中に散逸

P205～ 遺伝するもの、しないもの

「一卵性双生児」と「二卵性双生児」の比較 体重の類似性相関係数は0.8

P208～ 「こころの遺伝」の明暗

行動遺伝学は一貫して、知能や性格、精神疾患などの「こころ」に遺伝が強く影響することを示してきた。一卵性と二卵性の双生児の比較では、その影響は身体的な病気と同じかそれよりも大きく、自閉症や情緒障害といった発達障害は身長や体重よりも遺伝の影響が大きい。

…子育ての効果については、宗教や言葉などを除き、知能や性格に共有環境(=家庭環境)の影響はほとんど見られない。育った家庭にかかわらず一卵性双生児の性格はよく似ているのだ。→子どもの人格や能力・才能の形成に、子育てはほとんど関係ないということ。(残酷すぎる真実)

…子どもは親の思い通りにはぜんぜん育たないということである。

わたしは、遺伝と非共有環境によって「わたし」になる (P214～P215の表)

12 親子の語られざる真実

P216～ 「氏が半分、育ちが半分」の真偽

非共有環境の謎 (ジュディス・リッチ・ハリス「集団社会化論」)

わたし = 遺伝○ + 共有環境○ + 非共有環境×

(○はお互いを近づけるちから、×は遠ざけるちから)

P219～ 言語・宗教・味覚にまつわる遺伝の真相

移民の子どもはすぐに英語を流暢に話す母語は忘れてしまう。しかし、宗教は親の影響を強く受けている。→進化適応環境が重要なため…子どもにとっては、生き延びるためには近所の年上集団との人間関係(自分を取り巻く周囲との社会的コミュニケーション)が大切だから

P224～ 子どもはなぜ親のいうことをきかないのか

子どもにとって、「世界」とは友達関係のことだ

年齢・性別・人種によるグループづくり→親よりも「友だちの世界」のルールを優先→そうしないと仲間はずれにされ、「死んで」しまうから

「親が影響力を行使できる分野は、友だち関係の中で興味の対象外になっているものだけ」「子育ては子どもの人格形成にほとんど影響を与えない」

13 「遺伝子と環境」が引き起こす残酷な真実

P231～ 同じ遺伝子でも違う性格になるケース

子どもは友だちとの関係のなかで自分の性格(キャラ)を決めていく。同じ遺伝子をもっていても、集団内でのキャラがかぶれば譲り、異なる性格になる。

P233～ 「選抜された22人の少年たち」の実験

面識のない同じ環境・成績の子どもたちを集め、「ラトラーズ」と「イーグルス」の2グループに分ける

自然にグループ同士の対立抗争が始まり、日に日にエスカレート

集団への帰属意識形成(敵の奴らと仲間の俺たち)、仲間同士の結束(この間、チーム内のいじめは皆無)

P236～ 黒人少年が生き延びるたったひとつの方法

家庭環境よりも子どもの人生に大きな影響を与えるのは学校

ラリー・アンツのケース→環境を変えることで性格や行動に劇的な変化が生じる

P239～ 英才教育のムダと「バカでかわいい女」

ウィリアム・ジェイムス・サディスの人生 神童(英才教育)から暗転(転落)

「母親には育てられたが仲間とのつきあいがなく成長したサル」の状況

だからといって「親は無力」は間違い(親が与える環境は子どもの人生に決定的な影響を及ぼす)→友だちグループからの「同調圧力」に負けない、子どものもっている才能の芽を摘まない環境を与えることが大事な役割

あとがき (P243～)

悪い話

左脳の役割は自己正当化、すなわち自分に都合のいいウソをでっちあげること

効果的に相手をだます方法は、自分もそのウソを信じること

暴力や戦争をなくすために理性や啓蒙に頼ったところでなんの意味もない

自己欺瞞は無意識の働き

よい話

先進国での犯罪が大きく減少

冷戦終結後は国家による大量殺人が大幅に減少

理性が全く役に立たないわけではないことを示す

現代の進化論が突きつけている不愉快な真実は、ゆがんだ理性を暴走させないための安全装置

「ひとが嫌がるようなことをする表現の自由はない」(日本のリベラル新聞によるフランスの風刺雑誌『シャルリー・エブド』への批判)

→誰も不快にしない表現の自由なら北朝鮮にもある

→「(日本国)憲法に表現の自由が定められているのは、ひとが嫌がる言論を弾圧しようとした過去の反省によるもの、不愉快なものにこそ語るべき価値がある」

〈 レポーター感想 〉

「まあ、結局この本は、バツ本だと思いますがね…。」